

源氏物語の泣き表現

——「涙落つ」と「涙落とす」をめぐって——

伊藤 千夏

はじめに

日本人は、古来、人の泣く姿はもちろんのこと、泣くという行為自体に心動かされ、そこに一種の美を認めてきたように思う。

「あはれ」や「みやび」を第一義とした王朝文学に、好んで数多くの「泣き表現」が見受けられるのは、その点で特に注目される。そこで王朝物語の代表である『源氏物語』を取り上げてその泣き表現のすべてを調査してみると、簡単に分類しても約十種、合わせて約二百近くもの表現がとられていることがわかった。

さて作者紫式部がこれだけの泣き表現を使い分けたことには、やはりそれなりの理由があると思う。個々の場面、登場人物の状態に見合った表現がなされているはずである。

本稿では、比較的用例が多く、興味深い傾向をもつ「涙落つ」と「涙落とす」について検討してみたい。底本には、日本古典文学全集『源氏物語(一)～(六)』(小学館)を使用し、和歌を除く散文部分のみを対象とした。なお桐壺巻から幻巻までの正編と、匂宮巻から夢浮橋巻までの続編とに分けて見ていくことにする。

「涙落つ」の用例は、正編十四例、続編七例があり、その対象となっている人物及び内訳は次の通りである。

正編(明)源氏6 夕霧2 冷泉帝1 匂宮1

(女)紫の上1 明石の君1 女三の宮1 明石の尼君1

続編(明)薫2 匂宮2 小君(浮舟弟)1

(女)浮舟2

人物に関して気づくことは、正統ともにこの物語の主要人物であることである。二十一例という数は「涙」表現全体から見ても多い方であるのに、このように用いている人物が限られていることは第一の特徴と言えよう。

ではまず最も用例の多い源氏の場合から取り上げてみたい。源氏の場合、若紫巻一例、紅葉賀巻二例、賢木巻二例、須磨巻一例と、初期の頃に集中している。そしてこの六例を比較してみると、須磨巻の一例を除く五例について、非常に重大な共通点を見出すことができた。源氏の「涙落つ」が、ある一人の女性に関わる時

にのみ使われているということである。その女性というのは、源氏が思慕してやまなかつた理想の人、藤壺である。

源氏の「涙落つ」が最初に使われた若紫巻の場面は、有名な北山で紫の上を垣間見たところである。

▽頬つきいとらうたげにて、眉のわたらうちけぶり、いはけなくかいやりたる類つき、髪ざし、いみじうつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとよう似たてまつれるが、まもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。(若紫)

桐壺巻に描かれているように、亡き母桐壺更衣に似ていると皆が評判する藤壺に対する興味から、いつしか恋心を抱き始めた源氏は、許されない相手と知りながら、日々思いを募らせていた。満たされない思いに苦惱していた時、偶然見出した紫の上は、成長していく先の楽しみ美しい少女であり、源氏は一目で心を奪われる。しかし、彼女に引きつけられたのも、本当はかの藤壺に似ているからだという理由に気づくと、源氏は愕然としてしまう。その時の衝撃を「涙落つ」が表していると考えていいと思う。

紅葉賀巻の二例のうち、まず一つめは、若紫巻で懐妊した藤壺が、不義の子、後の冷泉帝を出産し、その若宮を抱いた桐壺帝と源氏が対面したところである。

▽例の、中將の君、こなたにて御遊びなどしたまふに、抱き出でたてまつらせたまひて、^帝「皇子たちあまたあれど、そこ

をのみなむ、かかるほどより明け暮れ見し。されば思ひわたさるるにやあらむ、いとよくこそおぼえたれ。いと小さきほどは、みなかくのみあるわざにやあらむ」とて、いみじくうつくしと思ひきこえさせたまへり。中將の君、面の色かはる心地して、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがたうつろふ心地して、涙落ちぬべし。

(紅葉賀)

「ぬべし」とあるように、実際には涙は落ちていない。もちろん桐壺帝を仰つてのことである。ここで不用意に涙を落とすことはできないと、罪の重大さが源氏をこらえさせたのだろう。少しでもこの緊張が弛むことがあつたならば、おそらく涙は落ちていただろうと思われるような状態である。それほど帝の言葉は源氏の心に突き刺さり、大きな動揺を与えた。「面の色かはる心地して、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがたうつろふ心地して」と、その時の源氏の心中が語られているが、その衝撃の大きさと「涙落つ」は無関係ではないだろう。

紅葉賀巻二つめの「涙落つ」は、この後すぐに出てくる。桐壺帝の御前から心を乱しながら二条院に退出した源氏は、心を静め、前栽の中に常夏の花を見つけ、それに添えて藤壺に消思した。

▽例のことなれば、しるしあらじかし、とくづほれてながめ臥したまへるに、胸うちさわきて、いみじくうれしきにも涙落ちぬ。(紅葉賀)

思いもかけなかった返歌があまりにも嬉しく、源氏は涙を落とすのだが、それはまるで先に桐壺帝の御前でどうかこらえた涙がとうとう落ちたかのようにも受け取れる。

そして賢木巻に入つて、まず一つめは、桐壺院崩御後、藤壺の寝所に忍び込むことに成功した源氏が、自分の思いを否応なしに訴えたために、藤壺は耐えきれなくなり胸を悩ませてしまい、人が騒ぎ出して、そのまま源氏は塗籠に押し込まれたままになつてしまふという、大変な場面に出てくる。

▽君は、塗籠の戸の細目に開きたるを、やをら押し開けて、御屏風のはさまに伝ひ入りたまひぬ。めづらしくうれしきにも、涙落ちて見たてまつりたまふ。藤壺「なほ、いと苦しいこそあれ。世や尽きぬらむ」とて、外の方を見出だしたまへるかたはら目、言ひ知らずなまめかしう見ゆ。 (賢木)

まさしく千載一遇の機会を得て、日の光のものと藤壺を見ることのできた感激に源氏は涙を落とす。前夜冷たく拒まれたことで傷心していたことも少なからず影響していただろうか。通例なら「涙ぐみて見たてまつる」とか、「涙をおし拭ひて見たてまつる」とあるところだろうが、ここでは強いて「涙落ちて見たてまつる」と表現している。そう表現することで、涙を拭いてもせずに、一心に見入っている源氏の姿、大きな感動を得ている彼の心中を的確に描いていると思う。

もう一つは、藤壺退出の奉仕のために再び参内し、御前に参つ

た時に見られる。

▽月のはなやかなるに、昔かうやうなるをりは、御遊びせさせたまひて、今めかしうもてなさせたまひしなど、思し出づるに、同じ御垣の内ながら、変れること多く悲し。

藤壺 このへに霧やへだつる雪の上の月をはるかに思ひやるかな

と命婦して甜こえ伝へたまふ。ほどなければ、御けはひもほのかなれど、なつかしう聞こゆるに、つらさも忘れられて、まつ涙ぞ落つる。 (賢木)

源氏は、藤壺の言葉とともに、その気配さえ感じることができた嬉しさに、日頃の辛さも忘れられて涙を落としているのである。以上が須磨巻を除いた源氏の「涙落つ」の用例なのだが、このように作爲的とも言えるほどすべてに藤壺が関わっている。

六例中五例までが共通点をもって用いられているにもかかわらず、須磨巻の用例だけは例外であった。

▽御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、独り目をさまして、枕をそばたてて四方の嵐を聞きたまふに、波たたここともとに立ちくる心地して、涙落つともおぼえぬに枕浮くばかりになりけり。 (須磨)

ここは須磨流鶯の身になった源氏の憂愁が描かれた場面であり直接藤壺には結びつかない。しかし、ここでの「涙落つ」はまた少し事情が違っていると思う。なぜなら、この「涙落つ」は単に

それだけを取り上げることが必ずしも適切であるとは言えず、むしろ「涙落つともおぼえぬに枕浮きぬばかりになりけり」という、韻律の整った一連の表現としてとらえられるべきものだと考えられるからである。「枕浮きぬばかり」も泣き表現の一つであり、「源氏物語」では他に三例見られる。「枕浮きぬばかり」について石田穰二氏は、「人は、任意の場合に枕浮くばかりの涙を流したのではない。枕が浮くといふ言い方からも察せられることであるが、この涙は、独り寝のわびしき、逢ひたい人に逢ひ得ぬ嘆きを喚く涙である」（『源氏物語論集』桜風社）と、その用法を述べられている。ここでの「涙落つ」は、先に述べたように、「枕浮きぬばかり」に付随した表現として考え、考察の対象から除外しても差支えはないと思う。

こうして見れば、源氏の「涙落つ」は、ほぼ藤壺に関わる感情を表現するための、とっておきの手段であったということが考えられる。一見なんの変哲もない泣き表現と思われる「涙落つ」ではあるが、「枕浮きぬばかり」を、「独り寝のわびしき、逢ひたい人に逢ひ得ぬ嘆きを喚く涙」と区別していた式部ならば、この「涙落つ」にも何か特定の意味を与えていたと考えることができると思う。

それを裏付けるような用例が夕霧にある。

源氏・藤壺の類型として、夕霧と紫の上が描かれようとしたことは周知の通りである。

▽空のけしきもすぎきに、あやしくあくがれたる心地して、

「何ごとぞや。またわが心に思ひ加はれるよ」と思ひ出づれば、いと似げなきことなりけり。あなもの狂ほしと、とぎまかうさまに思ひつつ、(中略)南の殿に参りたまへれば、まだ御格子も参らず。おはしますに当れる高欄に押しかかりて見わたせば、山の木どもも吹きなびかして、枝ども多く折れ伏したり。草むらはさらにも言はず、檜皮瓦、所どころの立部透垣などやうのもの乱りがはし。日のわづかにさし出でたるに、愁へ顔なる庭の露きらきらとして、空はいとすごく霧りわたれるに、そこはかとなく涙の落つるをおし拭ひ隠して、

(野分)

夕霧は野分の翌日、日頃源氏が嚴重に警戒していたにもかかわらず、紫の上を垣間見してしまう。右の場面はその翌朝の六条院である。夕霧は、一晚密藤を繰り返し、それでも垣間見た紫の上への恋慕の情を抑え切れず、伺候した六条院で野分のなごりの残る前栽を眺めながら涙を落としているのであるが、問題はここに再び「涙落つ」が使われたことである。源氏の場合、藤壺の出家を境に、「涙落つ」は全く使われなくなる。源氏と言えども、相手が尼となってしまったては断念せざるをえなかったわけで、それ以来二人の関係は全く政治的なものとなってしまったし、その上まもなく藤壺は死んでしまったので、「涙落つ」も不用となってしまったということだろう。それが、夕霧と紫の上との関係におい

て、過去の二人を彷彿とさせるような関係を描き、紫の上を垣間見るといふ衝撃的な場面に夕霧を遭遇させて、源氏と同じく「涙落つ」を用いているのだから、この一例も源氏の場合と決して無関係とは言えない。

源氏が藤壺に抱く思い、そして夕霧が紫の上に抱く思いは、共通して大きな罪悪感を合わせ持つものである。源氏の紅葉賀巻の用例に「恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも」という心中描写があったが、この複雑な心情が「涙落つ」という表現に集約されているように思う。事実夕霧の場合も「恐ろし」と「うれし」という心中が頻りに語られている。

二

さて、源氏・夕霧以外の人物の場合はどうだろうか。次にあげる紫の上・明石の君に関して用いられた二例にも、また興味深い特徴が認められる。紫の上の用例は、彼女の臨終がせまる頃、愛しい匂宮との別れの場面である。

▽紫の上「まろがはべらざらむに、思し出でんや」と問こえたまへば、匂宮「いと恋しかりなむ。まろは、内裏の上よりも宮よりも、母をこそまさりて思ひきこゆれば、おはせずは心地むつかしかりなむ」とて、目おしすりて粉らはしたまへるさまをかしければ、ほほ笑みながら涙は落ちぬ。(御法)

そして驚くことに、明石の君の場合も、実娘明石の姫君を紫の

上に委ねる決意をしたところに見られるのであって、すなわち我が子との別れを余儀なくされた母親の悲しみの涙として、全く同様に用いられているのである。

▽雪かきくらし降りつもる朝、来し方行く末のこと残らず思ひつづけて、例はことに端近なる出でぬなどもせぬを、汀の水など見やりて、白き衣どものなよかななるあまた着て、なごめたる様体、頭つき、後手など、眼りなき人と問こゆともかうこそはおはすらめ、と人々も見る。落つる涙をかき払ひて、明「かやうならむ日、ましていかにおほづかなからむ」とらうたげにうち嘆きて、(薄雲)

紫の上にして、明石の君にして、源氏に愛され、幸い人と称されながらも、幾度も忍従の涙を流している。にもかかわらず、源氏との関わり合いの中で「涙落つ」が用いられることは一度もない。その彼女たちが母親として描かれた時、我が子との別れを前にした悲しみに涙は落ちたのである。子を思う母の愛は何よりも勝るといふことだろうか。

さらに冷泉帝と匂宮に関して用いられた各一例では、紫の上や明石の君の用例と呼応するように、母親との別れを悲しむ子供の涙となっているのである。冷泉帝の場合、まだ春宮であった頃、藤壺がそれとなく出家をはのめかし、別れを口にした時である。

▽藤壺「……髪はそれよりも短くて、黒き衣などを着て、夜居の僧のやうになりはべらむとすれば、見たてまつらむこともい

とど久しかるべきぞ」とて泣きたまへば、まめだちて、
東宮「久しうおはせぬは恋しきものを」とて、涙の落つれば、
恥づかしと思して、さすがに背きたまへる、
（賢木）
そして匂宮の場合も、紫の上が死を覚悟して、後に残す幼い匂宮に別れを告げた時であった。

▽紫の「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに心とどめてもて遊びたまへ。さるべからむをりは、仏にも奉りたまへ」と聞こえたまへば、うちうなづきて、御顔をまもりて、涙の落つべかめれば立ちておはしぬ。
（御法）

紫の上と匂宮はもちろん母と子ではないが、それに等しい関係だったと考えて考察した。それにしても母と子の結びつきを強調するかのように、同じ状況を描くたびに繰り返し「涙落つ」を用いて表現しているところを見ると、そこに作者式部の何らかの意図が働いているように思えてならない。

夕霧の残る一例も、冷泉帝・匂宮の場合に近いものと考えられる用例である。

▽夕霧「何かは。六位など人の侮りはべるめれば、しばしのこととは思つたまふれど、内裏へ参るものうくてなん。故大臣おはしまさましかば、戯れにても人には侮られはべらざらまし。もの隔てぬ親におはすれど、いとけけしうさし放ちておぼい。たれば、おはしますあたり、たやすくも参り馴れはべらず。

東の院にてのみなん、御前近くはべる。対の御方こそあはれにもものしたまへ。親今一ところおはしまさましかば、何ごとを思ひはべらまし」とて、涙の落つるを粉らはいたまへる気色、いみじうあはれるに、
（少女）

夕霧が、官位のこと、雲居雁のことなど様々思うようにならないことが多くて、大宮と互いに嘆き合う場面である。夕霧はこの年に元服してはいるが、まだまだ子供らしい。ここで、源氏を父にもちながら、本当に自分を庇護してくれる親がないことを嘆き、そして実母葵の上の亡きことへと言及して涙する様子は、冷泉帝や匂宮の涙と相通じるものだと思う。

以上のように、「涙落つ」の用例を整理してみると、ほぼ二つの場合に限られて用いられていることがわかると思う。このように限定して用いられているのは、「涙落つ」が任意の「泣き」ではなく、格別の感動を伴うものであることを示していると言えるだろう。果たしてこうした「涙落つ」の用い方が、作者の意識的なものなのか、また元來備わっていた「涙落つ」に対する観念によってなされた無意識的なものなのか、いずれとも判断しかねるが、これをもって作者紫式部、そして『源氏物語』にせまる一つの契機とすることはできるに違いない。

三

ところで正編にはまだ二例の「涙落つ」が残っている。という

のも先にあげた二つの場合との関連性が欠けているからである。その一つは女三の宮の用例である。

▽まほにその事とは明かしたまはねど、つくづくと聞こえつづけたまふに、涙のみ落ちつつ、我にもあらず思ひしみておはすれば、
(若菜下)

ここは女三の宮が、柏木との密事が発覚してから半年余りの月日を経て、改めて源氏の訓戒を憎めない気持ちで受けているところである。

そして残る一例は明石の尼君である。

▽尼君も、ややもすれば、たへぬよろこびの涙、ともすれば落ちつつ、目をさへ拭ひただらして、命長き、うれしげなる例になりてものしたまふ。
(若菜下)

明石中宮改の第一皇子が春宮にのほり、念願かなった明石の尼君の喜びを描いた場面に用いられている。

この二つの用例に他の用例との類似点を見出すことは難しい。しかし奇しくも同じ巻に出でくるこの二つの用例に限って、「つつ」という反復・継続の助詞が接続している点は一考の余地があると思う。本来「落つ」が表す涙は決して継続的なものではない。「泣く」という状態までは至らないと言えるだろう。しかし「落ちつつ」となると、当然涙が繰り返して落ちるという意味になるわけだから、継続的な「泣く」に近い状態を表して下がると思う。もちろん、これまで見てきた「涙落つ」の内容からすれば、ここで

もそれ相応の意味をもつはずである。事実、女三の宮の方は、例の源氏・藤壺、夕霧・紫の上に続く、柏木との関係を描く中で涙であり、尼君の方は、長年耐え忍んだ末に得た人生最良の日の涙であり、それぞれに大きな意味がある。類似性の現れない要因は「つつ」の接続にあると考えるわけだが、それでも「涙落つ」が表すことのできる感動の大きさは、ここでも十分発揮されていると思う。

正編を見る限り、「涙落つ」が任意の涙でないことは明らかであった。おそらくは、それぞれがその人物にとつての「急所」ではないかと思われるような大事な涙だった。ところが統編にはいると、そうした関連性が全く消えてしまうのである。対象も、また状況も然りである。正編と統編では物語の内容も異なってくるから、正編と同じ規準で用いられるはずはないだろうが、統編でも「涙落つ」を用いる以上それなりの慎重さがあって然るべきだと思ふのである。もちろん関連性が失われていても「涙落つ」が個々に大きな感動を表していることには変わりはないかもしれないが、正編であまりにも厳格に用いられていたために、かえって納得できなかった。

『源氏物語』の泣き表現を調査した結果、正編と統編では異なる用語があったり、同一用語でも用いられた割合が異なるなど、表現上の差異がかなり見られたことも事実である。これらの点については、さらに様々な用例の検討が必要であろう。

四

「涙落とす」の用例は、正編にのみ十八例が見受けられる。まず統編に一例もないことが『源氏物語』における「涙落とす」の第一の特徴である。

正編十八例の人物及び内訳は次の通りである。

正編(男) 源氏 2 左大臣 1 明石入道 1 左馬頭 2 その他 11

(女) 夕顔 1

「涙落とす」の第二の特徴は人物にある。まず女性にはほぼ用いられないこと(夕顔の一例は、頭中將の会話の中に出てくるもので特殊な例と言える)、そして主要人物外の「その他」の用例が約三分の二を占めることである。この「その他」とは、上達部・殿上人たちとか、大徳たち、世間一般の人々である。

「涙落つ」が主要人物のみに用いられたことを考えると、「涙落とす」は全く対照的であると言える。そこで「その他」の用例に興味をもったわけだが、やはりその表現には特色があったのである。「その他」の涙は、すべて源氏あるいは源氏一族の賞賛もしくは哀惜の涙であり、それが源氏やその一族の優れた資質を際立たせるための常套手段として使われているということである。源氏に関するものを集めてみると、

▽かうぶりしたまひて、御休所にまかだたまひて、御衣褌りかへて、下りて拜したてまつりたまふさまに、皆人涙落したまふ。

(桐壺)

▽手をとらえて、源氏「我にいま一度声をだに聞かせたまへ。いかなる昔の契りにかありけん、しばしのほどに心を尽くしてあはれに思ほえしを、うち棄ててまどはしたまふがいみじきこと」と、声も惜しまず泣きたまふこと限りなし。大徳たちも、誰とは知らぬに、あやしと思ひてみな涙落しけり。

(夕顔)

▽僧都、琴をみづから持てまゐりて、僧都「これ、ただ御手ひとつあそばして、同じうは、山の鳥もおどろかしはべらむ」と、せちに聞こえたまへば、「乱り心地いとたへがたきものを」と聞こえたまへど、けにくからず極き鳴らして、みな立ちたまひぬ。あかず口惜しと、言ふかひなき法師童へも、涙を落しあへり。

(若紫)

▽さるいみじき姿に、菊の色々うつろひ、えならぬをかざして、今日はまたなき手を尽くしたる、入り綾のほど、そぞろ寒く、この世の事とおぼえず。もの見知るまじき下人などの、木のもと岩がくれ、山の木の葉に埋もれたるさへ、すこしものもの心知るは涙落しけり。

(紅葉賀)

▽あるべきかぎり、上下の僧ども、そのわたりの山がつまで物賜び、尊きことの限りを尽くして出でたまふ。見たてまつり送るとて、このもかものにも、あやしきはぶるひどもも集まりてゐて、涙を落しつゝ見たてまつる。

(賢木)

▽羅の直衣単衣を岩たまへるに、透きたまへる肌つき、まして

いみじう見ゆるを、年老いたる博士どもなど、遠く見たてまつりて涙落しつゝゐたり。

(賢木)

▽かくあはれなる御住まひなれば、かやうの人も、おのづからもの遠からではの見たてまつる御さま容貌を、いみじうめでたしと涙落しをりけり。

(須磨)

▽大臣の御はさらなり、親めきあはれなることさへすぐれたるを、涙落して誦じ騒ぎしかど、

(少女)

という具合である。また、

▽のどかに、袖かへすところを、一をれ気色ばかり舞ひたまへるに、似るべきものなく見ゆ。左大臣、うらめしさも忘れて涙落したまふ。

(花宴)

と描かれる左大臣の涙も同様に源氏の卓抜な姿に感動させられた涙である。こうした描写が何度も繰り返されることによつて、理想的男性源氏が確立されていると言えるだろう。

源氏一族と言へば、まず紫の上である。彼女の場合はその死を悼むもので、紫の上の優れた人柄を称えるものとなっている。

▽あやしきまですずろなる人にもうけられ、はかなくし出でたまふ事も、何ごとにつけても世にはめられ、心にくく、をりふしにつけつらうらうじく、あり難かりし人の御心ばへなりかし。さしもあるまじきおほよその人さえ、そのころは、風の音、虫の声につけつゝ涙落さぬはなし。

(御法)

そして夕霧に関しては、

▽寮試受けんに、(中略)あさましきまであり難ければ、さるべきにこそおはしけれと、誰も誰も涙落したまふ。(少女)とあり、源氏の孫にあたる子供たちも、

▽いとうつくしき御孫の君たちの容貌姿にて、舞のさまも世に見えぬ手を尽くして、(中略)めづらかに舞ひたまふを、いづれをもいとらうたしと思す。老いたまへる上達部たちは、みな涙落したまふ。

(若菜下)

と描かれる。こうして一族の者を賞賛することも、結局は源氏に對する贅辞となるのである。

こうして描かれる「涙」には不思議な力があると思う。どんな美辞麗句を迎ねるよりも、「涙落とす」の一言でその評價は最高となるのである。人に感動の涙を催させるほどすばらしいということであるから当然だろう。「涙落とす」は最高の贅辞として用いられる表現であると考えてよいだろう。

それでは統編でこうした「涙落とす」による贅辞が用いられなくなつたのはどういふわけだろうか。やはり両者の内容の相違に關係すると思われる。正編における主人公源氏は、光る君と呼ばれ、言わば神がかりな人物として設定されていた。それ故、彼の一挙一動に感動する人々を描き、王朝世界に君臨する源氏を強調することは非常に意義があり重要なことだつたと思う。ところが統編での男主人公は、当代一の貨公子ではあつても、ごく平凡な求婚者として描かれるに過ぎず、そこにはもはや神がかりの色

彩は失われている。宫廷社会を舞台にした源氏の栄華の物語から、都を離れた宇治川のほとりで展開する恋物語に変わった時、「涙落とす」は自然に用いられなくなってしまうのではないだろうか。華麗な王朝絵巻の中でこそ、「涙落とす」は真に生きた表現となることができたのである。

(昭和五十八年三月卒業)

研究室受贈図書雑誌目録(1)

- 活水日文(活水女子短期大学) 第七号、第八号
活水論文集 第二十六集
金沢大学教養部論集 人文科学編 20
金沢大学語学文学研究 第十二号
岐阜女子大学紀要 第十二号
岐阜大学国語国文学 第十六号
汲古(古典研究会) 第三巻
京都府立大学学術報告 人文 第三十四号
金城国文(金城学院大学) 第五十九号
近代文学論集(日本近代文学会九州支部) 第六号、第七号、第八号、第九号
研究紀要(尚綱大学) 第六号
研究報告集(国立国語研究所)
- 研究論集(開成学園) 第十一号
言語学論叢(筑波大学) 第二号
言語表現研究(兵庫教育大学言語表現学会) 第一号
言語文化(一橋大学) 19・20
高知大国文 第十三号
甲南国文(甲南女子大学) 第三十号
甲南大学紀要 文学編 48
国語学研究(東北大学) 二十二
国語教育(富山大学) 第八号
国語研究(横浜国立大学) 創刊号
国語国文(金沢大学) 第九号
国語国文学(福井大学) 23
国語国文学研究(熊本大学) 第十八号
国語国文学会誌(学習院大学) 第二十六号
国語国文学会誌(福岡教育大学) 24
国語国文学誌(広島学院大学) 第十二号
国語国文学報(愛知教育大学) 第四十集
国語国文研究(北海道大学) 第六十九号、第七〇号
国語国文論集(学習院女子短期大学) 第十二号
国語と教育(長崎大学) 第七号
国際日本文学研究集會会誌録(国文学研究資料館) 第六回
国文学(関西大学) 第五十九号、第六十号